

無限の前で藍を生きる人

下村和子詩集『手妻』に寄せて

1

人はなぜ自然の色彩に魅せられて感動するのだろうか。私
で言えば、朝日が昇る直前のシトリン（黄水晶）の夜明けの
色だ。一日が始まるほんの少しの時間だが、宮沢賢治の詩に
も出てくる色彩を、奇跡のように眺めていることがある。ま
た夕焼けが闇夜に向かつていく時の赤紫が藍色や紺色など
へ刻々と変化する色彩もまた、この世の奇跡のように心を掻
き乱す感動を与えてくれる。自然の色彩に人は人の世を超え
た根源的な力を感じ取るのだろう。詩人の中でも色彩感覚に
敏感な詩人がいる。下村和子さんもそんな詩人の一人だが、
その藍色に寄せる想いは尋常ではないものを感じていた。

下村和子さんは詩誌「コールサック」へ一九九四年から欠
かさず寄稿してくれている。丁度、同じ大阪に在住してい
て岩絵具で日本画を描いていた福田万里子さんが寄稿された翌
年ごろで、福田さんと下村さんといった関西の女性詩人は、
古代からの色彩を無意識に背負い今も生活に生かそうとして
いるのだとも感じていた。そんな出会いから私は下村さんの
詩を十数年読み続けてきた。下村さんは現代人が便利な生活

の中で忘れ去ろうとするものを一貫して見続けてきた。自然
の中で生かされているという古来からの自然観や人生観を当
たり前のように実践している詩人である。エコロジイとい
言葉が生まれる以前からエコロジイを生きていた詩人だった。
下村さんは今まで八冊の詩集とアンソロジー一冊を出し
ている。またエッセイ集二冊と朗読CDも二枚出している。
一九八四年に刊行した第一詩集『海の夜』には、「織る」とい
う詩があり、どこか無言劇を見ているような気がする。そし
て女と男の人生をかけた修羅場が彷彿としてくるだけでなく、
その中にも静謐な安らぎのようなものも感じられるのだ。

織る

男と争つて
負けた女は
言葉を捨てた
捨てた言葉を拾い
両手で握りつぶした女は
手首に力をこめて
糸を紡いだ

カタン コトン
カタン コトン

織機の前で

女は色彩を追つていく
青 黄 紫 黒
色は女のいのちにじゃれつく
回ってからんで
重なり合つて

カタン コトン
カタン コトン

女は
男のことはもう忘れて
自分自身を織りあげる
その布で自分を飾る
男が退屈して
それを見ている

下村さんはこの第一詩集を五十歳代になって刊行している。
詩は四十歳代になってからで、それまでは神戸市外語大学英
米学科に在籍していた頃より演劇活動に情熱を持っていた。
劇団制作座に入団し、モリエールの劇などで女優としてデビ
ューした。卒業後は英語の教師をしながら、夜は劇団を続け

た。ドストエフスキーの『罪と罰』の主人公のドーニヤ役で
出演もした。二十歳代は女優の外に戯曲を書いたり、舞台芸
術にのめり込んでいたようだ。三十歳代は子育てと映画シナ
リオを書くこととしていた。そのような経験を踏まえて、下村
さんは最終的に詩が最も自分に相応しい表現方法であると理
解したのだろう。

下村さんにとって第一詩集当時は、言葉に「織る」という
行為の持つ言葉を超えた重さを宿そうと試みていたのかも
知れない。戯曲の言葉は女優の肉体を通してリアリティを獲
得させる試みだが、その意味では戯曲的に書かれた詩集であ
ったかもしれない。

2

一九八七年に刊行した第二詩集『鳥になる』の冒頭に詩
「藍」があるが、この詩こそがその後の下村さんの詩作の豊か
な源泉になったと思われる。

藍

藍のいのちは
人の一生に比べられる
若い藍で建てた濃紺の着物を着て
胸高に帯を締めると

日本の祭礼をとりもどしたような気がする

藍は機嫌を損ねやすい
藍汁の中に手を入れていると
心の揺れが伝わってくるという
染色家は

(知恵で建て愛情で育てる)と微笑した
大事に守られた

熟年期の藍で染めた淡色は
日の光を吸いこんで
これは明度を増した完成の色
能衣装にも使われるとか

燃烧しつくした老液は
藻海のように動かず
その中に布を漬けると
白布は白のまま残り

藍はゆっくり呼吸を停止している
瓶から出された骸は
しずかに土に戻される
藍は肥料となって
来年のための
蓼草を育てる

目覚めると

雪だった

——一緒に死んだげる

四十年前に言った言葉が

いまこの古い座敷にのこっている

色の溶けかけた金箔の屏風にかこまれて
母屋の木魚をききながら

朝の怠惰をたのしんでいる

父が不在地主で

先祖伝来の田地をみんな無くした時

祖母は毎夜その罪を仏壇に詫びていた
視力を失っても

祖母は治療をいやがった

——これでええのえ

私と並んでねながら

子守唄のようにくりかえしていた

ひとりで死んでしまった祖母は

今も懺悔の布を織っているのだろうか

雪が近づくと

蔵に片付けた古い織機が

小さな音をたてるのだ

*

夕刻を告げる鐘が
東と西から響きあう滋賀の里の
庭に干した藍布が
空一杯の茜色の下で
はためいていた

下村さんの藍布には、故郷の滋賀の里で子供の頃に見かけた情景が想起され、その製作過程の細部が織りこまれている。藍とともに生きた人びとが立ち上ってくるのだろう。藍染の母胎となる蓼草から奇跡のように藍が生まれるリズムが、詩行に乗り移っているのだ。人の一生にも喩えながら藍汁の生成から自然に戻る過程が、この詩篇に刻まれている。下村さんの視線は、藍を鑑賞・消費するのではない製作する職人たちの目線なのだ。そしてその藍は蓼草と人の力の融合によって生まれた尊いものであり、その過程を畏敬する心が下村さんの詩篇にしみ込んでいる。これほど藍染に思いを込めて書かれた詩篇は、神戸の鈴木猿さんの藍などの染物詩篇以外には私は知らない。この詩「藍」の後には「刈安」の黄色を描いた「下染めの色」が続き、その後の三篇目に詩「滋賀の雪」が配列されている。

滋賀の雪

私が幾度か見た夢の中には

裏前栽からじつと屋敷を見守る

小さな白蛇がいた

今日の夜には

祖母が織った布が

若松につもった雪の上に

置かれているかもしれない

この詩を読むと、下村さんが子供の頃に極限の体験をしたことが分かる。農地解放で先祖伝来の土地を手放し目も見えなくなつた祖母は、死にたいと絶望的になっていた。実母が幼少の頃に亡くなり、母親代わりであった祖母の思いを察して、「一緒に死んだげる」と言つた子供の心に生涯、祖母の悲しみは刻まれているのだろう。そんな祖母であったが、すべてを無くした後でも、藍布を織り、その藍染の着物を愛する生き方は、下村さんに決定的な影響を与えたのだ。絶望の中でも決して暮らしの中での美意識を失わない凛とした存在感が、子供の頃の下村さんに引き継がれていったのだと思われる。蔵の中の織機が祖母の魂で動き出し藍布を織り始め、その藍布が夜明けの雪の上に置かれている様は、幻想的で壮絶な美しさを生み出している。

一九九一年に出した第三詩集『鄙道』の三番目の詩に「襷覗き」という詩篇がある。この詩篇は祖母と父との関わりを藍染めを通して語っている。

襷覗き

病院の白い布団の上に
祖母の染めた藍衣をひろげた
襷覗きのような男で終ってほしい
祖母が父に抱いた願いだっただ
藍の最晩年の色といわれるこの色は
静かな淡色だ
いくつもの藍襷が並んでいても
最後まで格調を落とさず
この秘色を出す藍は少ない
若くして夫を亡くした女は
夭折する藍も多く見てきた
藍の寿命もさまざまだ
やつと育てた・淡藍で祖母は絹糸を染め
息子の寸法に着物を縫って遺した
初め終った後の藍は
糸ほどの足跡も見せず

たコスト優先の暮らしから、かつて存在していた藍とともに生きる暮らしを一度見つめなおす視線が下村さんの詩にはある。蓼草が生い茂る野原を眺め、そんな「鄙道」を歩くことの憧れを記したのがこの詩集だった。祖母や父のことを語りながら、実は自分の暮らしの実践的なあるべき姿を探っていたのだろうと思われる。

4

第四詩集『耳石』の「藍青」では、海の底を藍襷にみだてて、海の青は多くの命の再生であることを語り、「私を焼いたら／骨の粉は紺屋に運んでほしい／私を染めこんだ藍の着物は／娘に残す贈り物／全くの孤独は無いと知らせたい」と記している。藍襷という海の中に散骨し、藍の着物になって再生したいと願っている。この詩集では自然といかに共生し、どうしたら地球の破壊を押しとどめることが出来るかを故郷の近江の風土を見詰めながら詩作している。

第五詩集『泳ぐ月』の「淡海の月」では、故郷の琵琶湖の月の光を次のように探していく。「夜も明るい街を抜けて／月を探しに電車に乗った／淡海は大きな闇の水鏡／山に守られて無絃の琵琶を奏でる湖／内湖遺跡から木製絃楽器も発掘された／祖母も父も仰いで育った蒼い光を探す旅」をして、下村さんは藍染を残すには、藍染を畏敬する自然な暮らしの心を取り戻すことが必要であると考えた。「蒼い月の光」を感じ

何を漬けても無色になって果てる
とんでいく鳥のように

死ぬ前の父は無言だった
身体中に転移した癌を抱えて
真直ぐに横たわっていた
痛みも訴えず

目だけはいつも窓の方に向けていた
飛び続けるものの羽搏きを聞いていたのだろう

死の前の病床で
襷覗き一色の着物は
力の限り藍の青と意志を主張していた

藍色にも、いろいろな色合いがある。その中でも襷覗きという淡藍に祖母がこだわり、息子である父のために織り上げていた藍衣を病室で身に着けようとする場面は、言い知れぬ感動を呼び起こす。母から生まれた子は、最期の時に母の手作りの藍衣で死への旅たちをするというあたかも演劇空間のような場面がこの詩を支えているように思われる。下村さんにとって藍染の衣を語ることは、祖母と父の生き方を語ることであり、さらにその藍にこだわる生き方に秘められた、つましい暮らしの美学を語ることなのだろう。人口染料に満ち

て、そこに藍と呼応し合う自然の色彩感覚を見出す旅をさりげなく記している。最もシンプルな暮らしとは、自然の一回限りの色彩を瞬時に発見する旅でもあるかのように物語っている。

第六詩集『縄文の森』の「寂」では、縄文の森の中の数千年時間へと私たちを誘う。「倒木が／そのままの形で朽ちている／そんな森は静かで青い／緑を茂らせる巨樹の間に／何百本もの消えていった樹が／ひしめき合っていて暗い／孫に場所と光を譲って／穏やかに時間を燃焼し／密なる空間になつていったものたちの気配／七千年という時間は計れないが……／私の過去 私の未来／じわつと感じられてくる」。下村さんは生きている巨樹よりも、縄文杉の倒木のある森のたたずまいに、言い知れぬ命の継承を感じ、「そんな森は静かで青い」という。倒木に青い光を感じている。それはきつと海の色や月の光に感じたと同じ藍色に類似した色合いだったであろう。自然の色彩を感じることが出来るには、海や月や森の気の遠くなる時間を感じることが必要であることを語っている。自然の色彩の奥に込められている時間を現代人たちは、残念なことだが忘れ去っている。

第七詩集『隠国青風』と第八詩集『風の声』にも自然の色彩から下村さんは永遠の時間を感じてそれを記そうとしている。

第九詩集『弱さの特性』の『蒼い時間』には弱さというも

の持つ強さが書かれているが、それを読み取るためには、森羅万象から与えられる光に永遠の時間ともいえる「蒼い時間」が溢れ出てくるまで見詰めてはならないのだろう。

蒼い時間

夜の仮死から覚めて昼の暮らしを始める前の静かな時間が好きだ 少しずつ明るくなって青を取り戻していく空を眺めている 空と海との境界線が見えてくる

*海の中に母がある

と言った詩人が居た遙か彼方に別れてある母との対話を樂しむ 青は遠い色 近付くと消える色 あれほどの深い藍の水も手にとれば 無い色になって掌の見馴れた筋を浮きたたせるばかり だから私は母の身体からだはもう探さない 魂だけを呼ぶ

重ねてきた罪の一つ一つを話せるのは母 弱いものが生きていくためには罪も犯した

一番大事な空や水も犯した そしてゴヤの黒い絵 あの餓鬼はわたし あなたからいただいた私に中を流れる水も粘っていくのが辛い

海の動きを眺めていると私も水の循環の輪に加わって浄め

られていくようで嬉しい 海の光の道があらわれる あれは私にとつての透明な祭壇 肉体の弱さは心の弱さではない あの青のように……

二度と現れない今朝の空 今の海を視詰めている

*三好達治

下村さんは七歳の頃に実母を亡くしたので、母との会話はほとんど覚えてはいないだろう。「青を取り戻していく空を眺めている」と母を思い出して、果たすことができなかった母との対話をいつのまにかしているのだろう。それはきつと母との魂の交流の時間であるのだろう。下村さんは人の心に住まう弱さを見つけて、ゴヤの絵の中に出てくる子供を泣きながら食べている「餓鬼はわたし」ではないかと思い始める。人がこの世に生きることが、他の生きもの犠牲と恩恵によって生かされていることを痛切に感じているのだ。空や海の青さを白紙の心で受け止めることによって、人は弱さを自覚して、逆に強くなれることを語ろうとしている。

5

新詩集『手妻』には二十五篇の詩が収録されている。この二十五篇には、第八詩集までの藍について書かれた詩篇を新たに書き直したのも入っているが、新しく書いたものが大半を占めている。下村さんが誰よりもこだわり続けてきた藍

を生きる暮らしを集約した詩集だ。下村さんの根源的なテーマを直視し、妥協することなく一冊の詩集に集大成したものだ。戦争中であつても父と茶道の宗匠とが茶を通して、「サイレンの鳴らない間」の静かな時間を過ごしていたのを書き記した詩「手妻」は、忘れがたい存在感を与えてくれる。

手妻

三月の雨は 音を消して下りてくる

花咲く前の街に しつかりと降る

屋根を濡らし 道を落着かせる

そんな日は 外出するのも億劫で

私は 独り茶会をする

免状を持たない 私のお茶は融通無碍

月の下で見れば

欠け茶碗も名器です

サイレンが鳴らない間は

私たちの時間ですからね

戦争が激しくなった頃

焼けだされた茶道の宗匠一家に

我が家の座敷一間を お貸ししていたことがあった

子供だった私は 側に座って

師匠と父の静かなお手前を見ていた

電灯を弱めた 影の部屋で見る

男一人の黒い背中が ずいぶん大きかった

縁側に敷いた赤い毛氈の辺りから

茶笥を動かす音だけが聞こえてきた

お茶は音でたてるのだと 独り 学んだ

悠然と茶を啜る父たちの姿は

私の理想になった

（「手妻」の前半部分）

下村さんは、戦時中に父と茶道の宗匠の二人の男たちが無言で茶を点て、茶を啜る場面と音の光景を心に刻み、生涯反復していくのではないか。国家の危急存亡の時にも悠然と茶を啜る行為が「私の理想となった」という。手妻とは、手が稲妻の如しというように手先のしなやかなことをいい、江戸時代の「胡蝶の舞」のように紙の蝶を扇子で飛ばす手品のことだ。父たちの手さばきが下村さんにとつて手品のようであったのだろう。またそれは心の奥深くにある美しいものに通じ、その扉を開く心の稲妻のような働きをして、下村さんを励まし続けた幸福な思い出になったのだろう。詩「手妻」の後半で江戸庶民の美意識や遊び心に下村さんは抵抗精神を感じ取っている。

制限の中で 咲かせる華は甘い

江戸の庶民も なかなかの知恵者だった

税の取り立てがきびしく

奢侈禁止令の出た町では

茶の湯も禁じられ

着るものは 木綿とされた

藍は絹と同じように 木綿に馴染み

鮮やかな青を創り出した

藍と白のくつきりとした二色の世界は無限に拡がり

町人たちの遊び心は 江戸の粋を生んだ

高価な茶釜を染め込んだ夜具にくるまっつて

夢の中の大茶会と洒落た

隠し文字が流行し 恋しい人の名も

こっそり染め入れた

鼠肩の役者の名を一文字

絵柄の中に もぐり込ませるのも一興

一本の横縞と六本の縦縞

合わせれば 市村羽左衛門

謎が解ければ 洒落者と

秘かに通振りを競った

青と白で表現される世界は 自由自在

たくましく生きる庶民を

藍は後押しした

きつぱりと残した白の海で

藍は 奔放に

おしゃべりしている

下村さんの藍の世界は、生まれ育った近江の蓼草から発し、祖母や父の暮らしに敬意を抱き自分の暮らしに生かしている。そんな藍染を突き詰めることによって、私たちに先住民のアイヌや沖縄での藍染や、千年も前に菅原道真筆の和紙にも染められた日本人の基底にある藍を使った暮らしを浮き彫りにしている。またネパールなど世界にもある藍染の文化の所在も明らかにしている。そして下村さんはその豊かな藍染の文化がこれからのエネルギーをむやみに消費しない文化へと移行している未来の世界で重要な役割を果たすのではないかと考えている。

詩集『手妻』ほど徹底して藍染について書いた詩集は、今まで無かったであろう。藍染めを愛し、もっと藍に近付きたい方にはぜひ読んでもらいたい。また環境問題や自然の色彩に関心のある方の心にも、この詩集はきつと「手品」のように光り輝くだろう。